

4.3 生態系の人為的な攪乱状況（外来種の分布状況）

鳥類の場合は、渡り鳥のように自ら大移動を行う種も多くいますが、アヒルなどのように家禽と飼われていたものや、ベニスズメなどのようにペットとして飼われていたものが逃げ出し、野生化して自然界へも広がっている例がみられます。

このような外来種が生態的に優勢な場合、在来の生物種を圧迫したり、自然界では起こらない交雑によって地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、人為的な生態系の攪乱を明らかにするために、外来種ではありますが同時に馴染み深い種でもあるコブハクチョウ、アヒル、ベニスズメの確認状況について整理しました。

【外来種（コブハクチョウ、アヒル、ベニスズメ）の確認状況】

（鳥類調査）

- ・ 外来種のアヒルを北海道を除く日本全国の一級河川 8 河川で多数確認
外来種のコブハクチョウ、アヒル、ベニスズメについて確認状況を整理しました。
コブハクチョウは関東地方の利根川と九州地方の川内川で確認されました。アヒルは東北地方から九州地方の 13 河川で確認されました。ベニスズメは確認されませんでした。
(資料掲載: 4-46~48、4-51 ページ)

確認河川数の比較（対象河川: 31 河川）

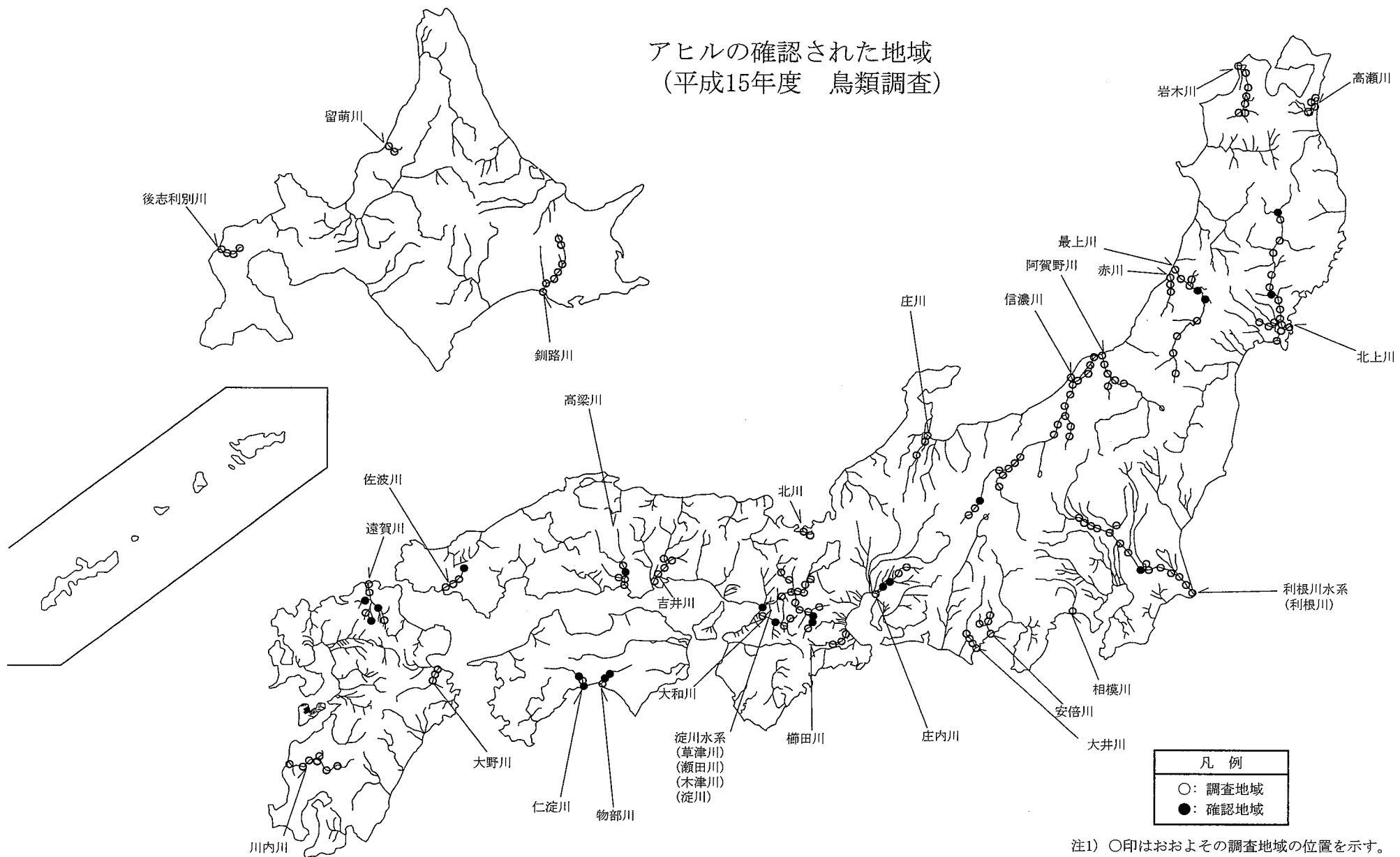
種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
コブハクチョウ	2 河川	2 河川	2 河川
アヒル	5 河川	9 河川	13 河川
ベニスズメ	2 河川	3 河川	0 河川

コブハクチョウは、ユーラシア大陸に広く分布している種であり、国内では動物園や公園等で飼育されていますが、逃げ出して、しばしば湖沼や河川で確認されるようになってきています。アヒルは、食肉と卵を取るためにマガモから品種改良された鳥類であり、農家などで飼育されていますが、逃げ出して野生化しています。ベニスズメは、ビルマからインドの河原やヨシ原、農耕地に生息する種ですが、観賞用として輸入されており、本州以南で野生化し繁殖しています。

コブハクチョウは関東地方の利根川と九州地方の川内川で確認されました。アヒルは、北海道地方を除く日本各地で確認され、河川数はやや増加していました。個体数の多い河川は、北陸地方の信濃川（33 個体）、四国地方の仁淀川（22 個体）、九州地方の遠賀川（48 個体）などでした。ベニスズメは、今回は確認河川が無く、減少傾向にあると思われます。

アヒルの確認された地域
(平成15年度 鳥類調査)

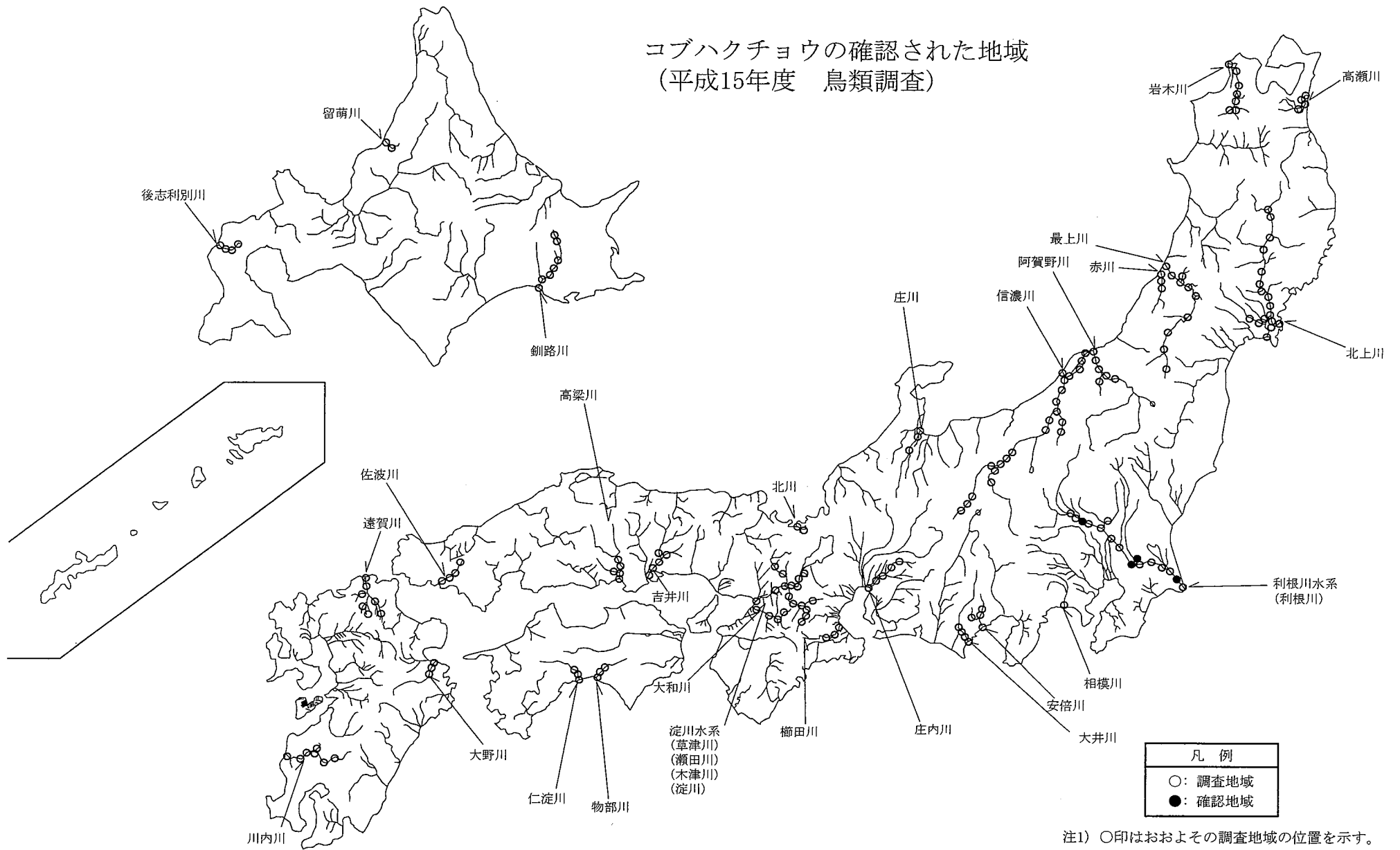
4-47



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注1) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。

コブハクチョウの確認された地域
(平成15年度 鳥類調査)



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注1) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。

コブハクチョウ・アヒル・ベニスズメの確認個体数

地方	河川名	カモ目		スズメ目
		カモ科		カエデチョウ科
		コブハクチョウ	アヒル	ベニスズメ
北海道	留萌川			
	後志利別川			
	釧路川			
東北	岩木川			
	高瀬川			
	北上川		6	
	最上川		3	
	赤川			
関東	利根川 (利根川)	18	3	
	相模川			
北陸	阿賀野川			
	信濃川		33	
	庄川			
中部	安倍川			
	大井川			
	庄内川		5	
	櫛田川			
近畿	淀川 (瀬田川)			
	淀川 (草津川)			
	淀川 (木津川)		4	
	淀川 (淀川)		5	
	大和川		18	
	北川			
中国	吉井川			
	高梁川		7	
	佐波川		2	
四国	物部川		6	
	仁淀川		22	
九州	遠賀川		48	
	大野川			
	川内川	1		